

# 再開発にGOサインで 「シモキタ」騒乱

前代未聞の訴状がある。その目次には「はじめに」と記され、さながら郷土史家の本のようにシモキタの歴史が描かれる。シモキタを愛する人々”として、坂本龍一やピアニストのフジ子・ヘミング、ドイツの映画監督、ヴィム・ヴェンダースまで登場する。「裁判官もなんじやこりやと思うかもしれませんが」



住民運動も展開中

とは原告代理人のひとり、石本伸晃弁護士。むろん、読み進めるうちに法律用語も増えてきて、最終的には難しい訴状となるのだが。「物語的な部分は補足的に最後に書かれることが多いのですが、一般の方にも興味を持って貰えるようにこうした形にしました」

通称・シモキタ。小田急線と京王井の頭線が交差する下北沢駅周辺を言う。若者の街であり、ファッション、小演劇の街として紹介されるが多く、狭い路地に小さな店が蔭めく街。

このシモキタの再開発事業が10月18日、東京都に認可されたのだ。小田急線の地下化にともない幅26mの都道、駅前ロータリーの整備などが予定され、生活と文化を育み、地域の心となる安全で住み良い賑わいの街”を目指すという。「広い土地もなく、狭い路

地だからこそ、大手資本も参入してこないし、個別商店が寄り集まる、独特の街が出来上がったんです。道路が出来れば、街は分断され、高層ビルも建てられるようになる。テナントは家賃も上がって、店をたたまざるを得ない。そうなったら他の街と同じで、シモキタの魅力はなくなります」

とは、この街で32年になるジャズバー、レディージエーンの大木雄高氏。冒頭の訴状はこの再開発を阻止せんがためのものだ。「そもそもは昭和21年に決定された戦後復興計画が紆余曲折して甦ったものです。しかし、今回の計画は都市計画とは名ばかり。昭和44年に運輸省と建設省との間で結ばれた協定を利用し、事業に道路特定財源を投下させるために鉄道と不要の道を立体交差させる、巨大な公共事業でしかないのです」(前出の石本弁護士)

被告となった石原都政にとって五輪誘致より長期戦になりそう。第1回口頭弁論は11月20日。

